

スポーツの継続要因・非継続要因～結果、中位層選手に着目して～

指導教員 小林豊

氏名 赤松 成

研究背景

日本の運動部活動は学生にとって主要なスポーツ経験の場であり、その継続は成人期のスポーツ実施にも影響する。しかし既存研究でチーム内の実力差や役割の違いが継続意欲に与える影響は十分に検討されていない。本研究では実力認知や入賞経験が成人期のスポーツ継続に与える影響に着目する。

研究目的

本研究ではウェブアンケートを通じて以下4つの仮説を検証する。

- ①結果を残している選手はスポーツを継続している可能性が高くなる。
- ②チーム内での実力が中位程度のものが最もスポーツをやめやすい。
- ③結果を残していなくても、チーム内での実力が高いと認識していればスポーツを継続する可能性が高い。
- ④結果を残していないことによる負の効果は、中位で最も大きくなる。

調査・分析方法

ランサーズ登録者200名を対象にQualtricsでアンケート調査を実施した。競技種目、経験年数、入賞経験、現在の継続状況、継続理由（自由記述）に加え、部活動での主観的体験15項目を測定した。

分析結果

因子分析により「満足度」「自己の活躍と自信」「部活動の厳しさ」の3因子を抽出し、スポーツ継続（Yes/No）を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。その結果、スポーツの継続に有意な影響を示したのは入賞経験のみであり、主観的体験（自己の活躍と自信・部活動の厳しさ・満足度）は継続に影響しなかった。継続率が最も低かったのは下位層であり、仮説2も支持されなかった。自由記述欄の分析から、継続できない理由は外的要因が中心であるが、モチベーションの低下も無視できない要因であることがわかった。一方、継続理由は楽しさ・人間関係が中心だった。

考察

成人期のスポーツ継続には、学生期の主観的体験よりも成功体験（入賞経験）が強く影響することが示された。一方で、継続を阻害する主因は社会人としての生活環境であり、部活動経験の効果が外的要因に上書きされている可能性がある。中位層に関する仮説はサンプル不足により十分検証できず、今後は継続者・非継続者を均等に集める調査設計や学生を対象とした研究が必要である。